研究ノート

ジョルジュ・サンド生誕二百年記念とスリズィ国際学会

——二〇〇四年の世界のサンド研究——

西尾治子

本稿はサンド生誕二百年を記念し、日本を含む世界各地で開催された国際シンポジウムを視野に入れつつ、スリズィ国際学会を中心に世界のサンド研究を俯瞰するものである。

Ⅰ．作家生誕二百年記念と世界のサンド研究の動き

ジョルジュ・サンドは、一八〇四年七月に誕生した。しかし七月の初めの何日であったのか、正確な誕生日についてはサンド自身も定かではなかったことが『わが生涯の記』に記されている。書簡集を辿る限りでは、サンドは毎年七月五日に誕生祝いをしていたようである。この混乱の理由として二つの推論が可能である。革命後のナポレオン帝政が台頭する混乱期にあって、子供たちの出生日が役所の戸籍簿に正しく登録されていなかった可能性があること、また、この日は革命歴ではⅫ年の収穫月（共和歴の第十月＝六月一九日～七月一九日）に当たるが、どこかでこの暦を数え間違えたのではないかという憶測である。サンド研究者の間では、七月一日説と七月五日説の二説が主流をなしている。

サンドの正確な生誕日を巡る諸説はさておき、二〇〇四年を前後して作家ジョルジュ・サンドに対する関心と作品研究の機運は世界中で予想外の高まりを見せた。フランス本国では、サンド作品の復刻版を始め、研究書、一般書などサンドに関する夥しい数の書物が出版された。ジョルジュ・サンドは出世作『アンディヤナ』*Indiana*（1832）により十九世紀初頭の文壇に作家としての確固たる地位を築き上げたが、四〇年余の作家生活の生涯にわたり、膨大な量の著作を残した。その数は、小説・短編小説・コント九〇以上、戯曲約二〇作品にのぼり、それ以外にも自伝的作品、文芸・芸術・政治批評、新聞記事、作品とみなし得るともいわれる書簡（二万通）がある。小説ひとつを取り上げてみても、修養小説・歴史小説・社会主義小説・幻想小説・田園小説・書簡体小説など、小説がとり得る、あらゆる形式に挑戦したかのようであり、実際、様々なジャンルの小説を書き残している。つまり、ジョルジュ・サンドは、詩を除くあらゆる文学ジャンルにおいて、男性作家

に並ぶ豊かな創作活動を展開した作家であり、当時のフランスのベストセラー作家だったのである。ところが、バルザック研究家のベルナール・ギュイヨンのように、サンド研究者以外にもサンドを非常に高く評価した文学研究者も数多くいたとはいえ、一般的には十九世紀後半から二十一世紀のつい最近に至るまで、レアリスムの波に乗り遅れた単なるマイナーな作家とみなされ、フランス国内の高校の授業でも男装をする女性田園小説作家と教えられてきた。最近の日本の仏文学史もサンドに関してはごく僅かな頁しか割いていなかったり、なかにはまったく無視し、他の作家のように独立した項目を設けていないものさえある。ややもすれば、サンドの恋多き私生活への興味本意な嗜好や偏見が先行し、サンドの作品そのものへのアプローチに欠ける閉ざされた文学批評の状況にあって、二〇〇四年は疎外されたサンド文学そのものの再考と作家の失われた栄誉の復権獲得のためのまたとない好機となったといえよう。

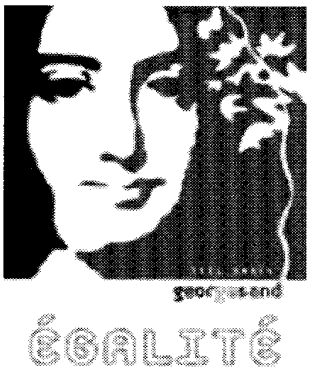
二〇〇二年には、イタリア・ヴェローナの「イタリアとサンド」、アメリカではニューオーリンズの「サンドの帝国観と文学」（後者の二つの国際学会に筆者参加、一部発表）をテーマとする国際学会が開催され、その後、ボストン、ニューヨークでも、それぞれ「実験的エクリチュール」「サンド―家族と共同体」と題するコロックが開催された。ベルギー、オランダ、ドイツ、ハンガリー、コンゴ、ブラジル、インド、ベトナム、中国、韓国でもサンド研究や演劇などに関する様々な催しものが、この年、活発に展開された。アジアではとくに中国で、八月に五〇の大学の文学研究者が集い、「フェミニズム」、「田園小説」、「サンドの散文」、「ボードレールとサンド」、「『アンディヤナ』を読む」をテーマとする国内学会が開かれている。

二〇〇四年に「日本ジョルジュ・サンド研究会」を改称し、新たに誕生した「日本ジョルジュ・サンド学会」は、前年に『十九世紀フランス女性作家、ジョルジュ・サンドの世界―生誕二百年記念』を刊行したが、本書は日本国書刊行会の指定図書に選定され、ほどなくして重版された。この経験をもとに当研究学会は、その翌年、「Cycle Geroge Sand au Japon」を企画、その一環として国際シンポジウム「ジョルジュ・サンドの二十、二十一世紀への遺産―芸術と政治」および関連する各種講演会を、東京、京都、神戸、福岡など日本各地で開催した（詳細については後述の補遺を参照）。このシンポジウムは「日本フランス語フランス文学会」、仏政府、日仏会館、東京日仏学院や主要各大学、出版社、フランス語教育関係機関の協賛と賛助を得て、フランスから著名なサンド研究者六名を招聘した大がかりな国際学会となったが、ここでは芸術と政治あるいは小説技法のテーマを中心に田園小説以外の多くの知られざるサンド作品を取り上げた。総計一六名の日仏両国のサンド研究者がフランス語の研究発表と討論会をおこなったが、女性学会員が中心となってアジアで初めて開催された大規模な仏

文学の国際学会であったことから、とりわけ仏、米を始めとする海外のサンド研究者の耳目を集めたようである。

Ⅱ．フランス政府のジョルジュ・サンドに対する情熱

フランス政府は二〇〇三年三月六日、文化コミュニケーション省の通達を介し、二〇〇四年を国家の「ジョルジュ・サンド年」とすると発表した。この時以来、外務省、文化省、科学省、農林省、職業の平等とパリテ兼女性の権利省などの協力のもとにR・プラット文化担当官が中心となって、フランスのサンド年が強力に推進され、サンドに関する世界のあらゆる情報が文化コミュニケーション省に集約されることになった。政府のホームページに「サンド年」専用の巨大な凝ったURLが特設される一方、ロゴが作成され（作家の肖像の下に「平等」と記し、フランス国旗の赤、青、白のトリコロールでカラーを統一したもの）、サンドに関するあらゆる生誕記念事業にこのロゴを使用するよう関連機関に周知された。



「ジョルジュ・サンド年」ロゴ

二〇〇四年の初めには、国民議会（下院）が開かれるブルボン宮で「政治におけるサンド」（歴史学者M・ペロー主催）をテーマとするコロックが、また一二月には同じ場所で「文学と政治」（ヴェルサイユ大学教授M・リッド主催）に関するサンド・コロックが開催された。

一方、政府は七月には国家行事の枠組みで生誕二百年記念祭典を催した。この祭典の開催地は、フランス中部地方のラ・シャートルにほど近い、サンドの故郷ノアンの城館であった。ショパンが七年の夏を過ごしたサンドの生家である。ここには世界各地から文学や音楽・美術関係者、政治家、女性ロビー団体など各界のサンド関係者が招待された（筆者はゆかた姿で参加）。パリのオーステルリッツ駅を早朝に発った一行は、ラ・シャートルで数台の専用バスに乗り換えたが、折からのテロを警戒してか、バスの前後左右を警備のオートバイの群に伴走されてノアンに到着した。シャトーの入り口では、当時の民族衣装を着飾った男女の地元の人々と音楽隊の奏でる厳かな風笛の調べが訪問者を歓迎してくれた。サンドの城館にはマスコミ陣やテレビ局のカメラが入り、政府の文化コミュニケーション大臣がシラク仏国大統領の作家を讃えるスピーチを読み上げた。ついでコメディー・フランセーズの総支配人のサンドの『わが生涯の記』に関する朗読が続き、その後、四百名の参加者にシャンペンのビュッフェと庭園での昼食が供された。この間に文化コミュニケーション大臣はヘリコプターで帰還したとのことだった。この年には、サンドの肖像を模した記念金貨や記念切手も

発売されている。

サンドの正確な誕生日を巡っては七月一日と五日の二説があることから、スリズィ国際学会が七月一日から八日間のコロックを開催したのに対し、仏政府の国家の祭典は二つの説の中間の七月三日に設定されていた。こうしたきめ細かな采配ぶりや大がかりな国を挙げての祭典が如実に示しているように、フランス政府の思い入れには

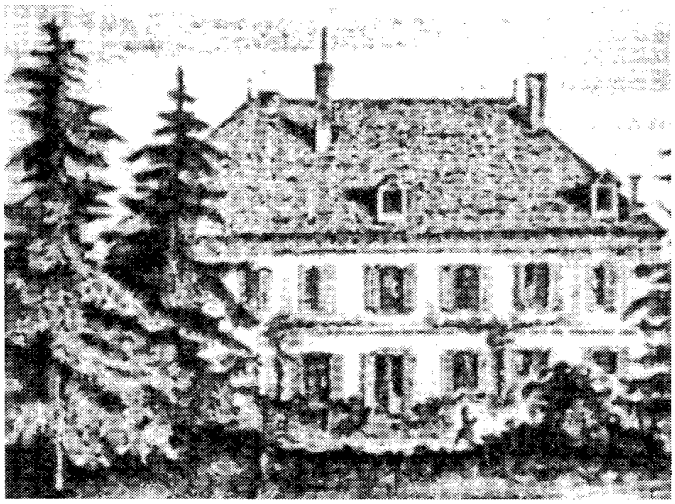


写真2　ショパンが7年の夏を過ごしたノアンの城館

並々ならぬ熱意が感じられた。サンドは、時代を超えて多くの作家や詩人、芸術家たちに敬愛された希有な作家だが（バルザック、フロベール、ゾラ、ハイネ、ミュッセ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、プルースト、ショパン、ドラクロワなど）、国際的に多大な影響力をもつ国民的女性作家サンドに対する政府の熱い思い入れは、この機会に米国のヘゲモニーに隠れて影の薄くなりがちな現代ヨーロッパのあるいはフランスの再興を文化的な側面で実現しようとする政府の極めて強い意志の表れであったのかもしれない。これが国家の文化政策となってサンド生誕記念行事に著しく反映されていたと読み取ることも可能だろう。サンドの葬儀に際し、ヴィクトル・ユゴーはその弔辞の中で「サンドはわが国の誇りとなるだろう」と作家を讃え、フロベールは号泣し、後に「マダムはフランスの偉人として、希にみるフランスの栄光として、永遠にその名を残すだろう」と書き残していることにも大いに関連することと思われる。

政府の刊行資料（A4・全三一二頁）によれば、生誕記念に関連する催しは世界で八二四件を数えた。その内容は、シンポジウム・講演が二二七、展覧会一六三、演劇・コンサート三四八、映画三四、このほか、旅行ツアー、サンドゆかりの地の文学散策、コンクールなど五二、映画上映三四であった。催しもののあらましと開催国は以下の通りである。

【フランス国内】

●ツール、オルレアン、ディジョン、グルノーブル、ナント、トゥルーズ、カルカッソンヌ、ルルド、リヨン、シャルメット、サロン・ドゥ・プロヴァンスなど国内のあらゆる地方で、シンポジウム、講演会、展覧会、コンサート、演劇、記念植樹、サンドを偲ぶ集いや文学散策など様々な催しがおこなわれた。なかでもパリ市歴史図書館で開催された「ジョルジュ・サンド、その人生と作品」展は、一〇日間で二万人の集客数を誇った。

●ミッテラン前大統領が創設したラ・ヴィ

レット科学都市にある道路が「ジョルジュ・サンド通り」と命名された（ジョルジュ・サンド通りは、「フランコフォニー広場」と呼ばれる広場に通じる道である）。

●政府の男女平等監視局がパリ三区と連携し、ジェンダーの問題を取り上げる講演や展示会を開催する一方、ノアンとガルジレスでは、ECHESS（社会科学高等研究院）のF・ガスパールがアフガニスタン、イラク、パレスチナ、チャド、カンボジアの女性作家やフェミニズム運動家を集めて「世界の女性達」と題するコロックを組織し、現代女性が直面している問題とサンドのフェミニズム思想との関連について考察した。

●メディアに関しては、フランス文化放送France Cultureが年間を通して十回のサンド特集番組を編成、ラジオ・クラシック、フランス・アンフォ、フランス・アンテルのほか、TV5、フランス2、フランス3などもサンドの特別番組を放映した。また、ル・モンド、ヌーベル・オプス、マガズィンヌ・リテレール、リール Lireなど、新聞、文芸批評誌の紙媒体メディアもサンド特集を組んだ。（Magazine littéraireの特集号には日本のサンド国際学会の招聘者の多くが健筆を揮っている）。

【海外諸国】

●海外ではあたかもオリンピック参加国かのように、数々の国がサンドの生誕を祝う各種の催しを実施した。四三カ国にのぼる諸国は次の通りである。ドイツ、オーストリア、アゼルバイジャン、ベルギー、ベラルーシ、ブラジル、ブルガリア、カメルーン、カナダ、中国、コンゴ（RDC）、韓国、コスタリカ、スコットランド、アラブ首長国連邦、スペイン、合衆国、ハンガリー、インド、アイルランド、イスラエル、イタリア、日本、リトアニア、リビア、マラウイ、マリ、モロッコ、モーリシャス、ノルウエー、オランダ、ペルー、ポーランド、プエルトリコ、ポルトガル、カタール、ルーマニア、スロバキア、スウェーデン、スイス、トルコ、ヴェトナム、ザンビア。

●ブラジルでは、二〇〇四年三月にジョルジュ・サンド・コンクールが創設され、優勝を勝ち取った一名の学生にフランス留学一ヶ月の賞が授与された。これはSciences-po（パリ政治学院）の四名の女子学生たちの発案によるもので、アリアンス・フランセーズ、在ブラジル・フランス大使館およびブラジル国際フランス語教授連合の協賛とエールフランスの賛助のもとに、フランス語とフランコフォニー週間祭の枠組みで実施されたコンクールである。

●日本が開催したジョルジュ・サンド国際シンポジウムについては、この仏政府刊行の『サンド生誕二百年ドキュメント集』は、大学人が主催した国際学会がダイナミックなサンド研究の推進と発展に大きく寄与したことを強調しつつ、日本の国際シンポジウムを、フランス、アメ

リカに次ぐ、中国より前の三番目に取り上げ、フランス人研究者が参加した学際的な国際学会であったことを特色とするシンポジウムであったと紹介するほか、数カ所で日本について言及している。

Ⅲ．スリズイ・ラ・サル CERISY LA SALLE 国際学会

これら一連のサンド生誕記念行事のなかで特筆すべきは、文学者を始め、哲学者、数学者、写真家、建築家など様々な学問分野における著名人の国際学会を開催することで知られるフランスのスリズイ・ラ・サルで、サンド学会が開催されたことである。二〇〇四年七月初旬、モン・サン・ミッシェルに程近いノルマンディ地方に位置するスリズイの古城には世界各地から約百名のサンド研究者が参集した。テーマは「エクリチュール—実践と想像力」であった。日本サンド学会からは筆者を含む三名が参加し、最先端のジョルジュ・サンド研究の息吹に触れることができた。

主催者発表のスリズィ・ジョルジュ・サンド国際学会概要は以下の通りである。

期　日：二〇〇四年七月一日～八日

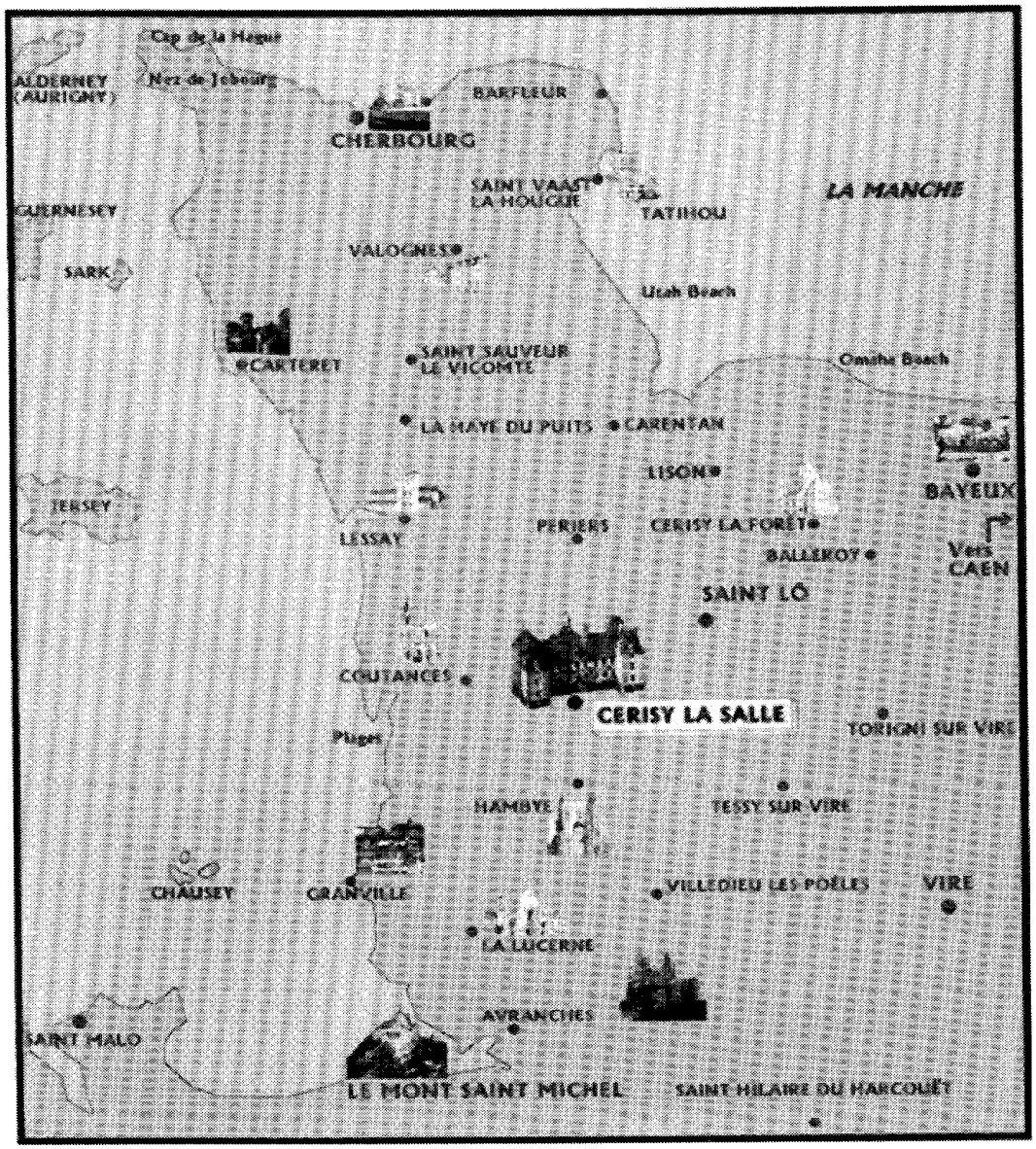


写真 3　地図

テーマ：「サンドのエクリチュール—実践と想像力」

主催者：ブリジット・ディアズ
Brigitte Diaz
イザベル・ナジンスキー
Isabelle Naginski

【シンポジウムの概要】

ジョルジュ・サンドはその百編におよぶ膨大な作品を残したことから、しばしばバルザックのように「十九世紀の最も多産な作家」という言葉に収斂されてしまいがちな作家である。この国際シンポジウムでは、このようなサンドのイメージの影となってしまい疎かにされがちな「サンド文学における創作論」を主要テーマとした。テーマの分類と内容は次の通りである。

(1) 作品の成立過程の問題—自筆原稿を考察する

一部の批評が好んでサンドにつけるレッテル「最も実り豊かな作家のひとりである」というカリカチュア化された作家像ではなく、「仕事をする作家」としてサンドを捉える。創作のために情報収集した資料や作品の創造過程について、また、『レリヤ』*Lélia* や『スピリディオン』*Spiridion* のように異なる二編をもつ作品あるいは演劇化された作品、作品の他の形への移行の問題を照射する。

(2) エクリチュールの実験室

作品創造に携わる作家の生涯を通して、サンドはどのようなエクリチュールを目指し、その作品はどのような変遷過程を経て小説として練り上げられ完成をみたのか。サント・ブーヴ、バルザック、フロベール、シャンフルリなどとの往復書簡にその足跡を辿ることができるであろう。小説の推敲、小説創造の過程、出版と読者の反応をも射程に入れた考察を試みる。

(3) 序文のディスクール

サンドは、三十九本の序文、および後に付け加えた前書きや覚え書き、そしてサンド全集のための三つの種類の注目すべき序文を書いている。文学の理論化を頑なに拒否しつつ、しかし、そこには自分の作品をどのように読者に読んでもらいたいか、いわば、作家が読者に読んでもらいたい作品の読み方が提示されているがゆえに、これらの序文を戦略的テクストとして捉えることが可能だ。このほか同時代人の読者に向けて書かれた数多くの序文に準ずるディスクールも見逃すことはできない。

(4) 小説のジャンルの問題

サンドは様々な文学のジャンルに挑戦した。小説はもちろんのこと（私的な小説、叙情的な小説、田園小説、レアリスム小説）、コント（短編、童話）、中編小説、書簡、日記、自伝、演劇など、詩を除く様々な文学ジャンルにおける創作を試みた。ユゴー、ヴィニー、ゴーチエにも検証される、このような超域的なジャンルの横断あるいは間ジャンル性について考察する。

(5) 文体の問題

当時の批評はサンドには「美しい文体」が欠けていると批判した。サンド自身は、まつり縫い ourlet（縁かがり）をすると同じくらい容易に小説を書けると言ったが、

それでは、サンドは「文体をもたない作家」なのだろうか。こうした固定観念とは裏腹に、サンドは言葉についてあるいは語法に関して深い洞察を巡らしている。文体について恒常的に自ら問いかけをおこなうサンドを蘇らせる。

(6) 作家を考える

サンドは、二度の革命を経験したという意味で使用される十九世紀という「革命された世紀」において、自らの作家の位置、社会的あるいは女性としてのステイタスについてどのように考えていたのだろうか。当時の文学空間において、サンドの作家としての場所はどこにあったのか。現前の作家の社会的位置について、恐らくサンドが自ら望み、再構築しようとしたであろうサンドの「作家としての位置」について考察を試みる。

【発表の概要】

主催者が発表した以上の六つの観点から分類された三十余の発表が八日間に渡って繰り広げられ、会場の中世の古城をサンド研究の熱気を帯びた知の磁場に変容させたのである。

主要テーマは「サンドのエクリチュール」であったが、中でも(2)の「エクリチュールの実験室」に分類されるポエティックや小説技法に関するテーマに多くの発表が集中していた。

初期作品に検証される「エクリチュールの二元性」に着目した発表のほか、「『イジドラ』における誘惑とエクリチュール」は、この作品が男性作家の美学的規範に沿って書かれている点で十九世紀の娼婦文学の一環をなしているとしながら、「誘惑者のテクスト」『イジドラ』は伝統的な文学創造のメタファーを根底から覆す「サンドの現代性を表象する小説」であると論じた。また、作品中の地理的表記には集合的な想像力を継承する神話を伴っているが、こうした想像上の現実を再構築する典型的なサンドの「空間のポエティック」を強調した発表、一八五〇年代以降、劇作家として認められ始めたサンドの「劇作のポエティック」は作者固有の独創性に富んでいるだけでなく、幻想とフィクションの問題に連結する倫理と美学についての深い考察を礎にしていることを指摘しつつ、「演劇と小説の創作における相関性」について言及した発表、劇作に関しては、このほか、デュマ・ペールの「あらすじに重点を置く十九世紀の伝統

写真4　スリズィ城正面

的な劇作技法」に対し、登場人物を中心に作品を構築するサンドの斬新な劇作詩法について考察した発表もあった。他方、小説『レリヤ』（三三年版・三九年版）と「ピグマリオン神話」との比較分析を通し、小説理論構造においてバルザックやスタンダールとは立場を異にするサンドを、「レアリスト詩学あるいはレアリスム文学のテキストに対する意義申し立てをおこなった最初の十九世紀女性作者」として捉えた発表、あるいはA・モンタンドンの「社会詩学論sociopoétique」とバクーチンのラブレーとドストエフスキーのテクストにおける「民衆の祭と笑いに関する理論」に立脚し、語りと意味論をも射程に入れつつ、サンドの「文学空間の旅人」あるいは「都会の散歩者」としての側面と女性作者に固有の「想像と表象のエクリチュール」を「社会的相互作用」という観点から照らし出した発表など、ポエティックのテーマについての発表には印象深いものがみられた。

「序文のディスクール」に関する発表については、サンドはほとんどの作品に序文をつけているが、作品そのものの内容については記述していないとし、サンドの序文の特殊性は、創作の過程の文脈化にあり、そこには常に「小説を発明し」（ゾラの言葉）、創造する自己があること、またジェームズ、ドストエフスキー、プルーストにとってサンドの文学作品は「驚異とロマネスクの威光への入門書」であったことを序文のディスクールを例に提示した「序文の舞台――ジョルジュ・サンドとインスピレーション」、このほか、「作品の成立過程の問題――自筆原稿を考察する」に分類される発表では、最初は他の作品の序文にしようと考えていた断章が結果的にはまったくジャンルの異なる小説に移行してしまった作品について、政治的・宗教的題材を扱うことを禁止する出版社との連載小説に関する契約がゆえに、「小説の目的に関する小論文」ともいえる極めて文学的な作品となった小説の存在を明らかにした「ラ・フィユル、極めて文学的な小説」などが注目された。

「小説のジャンル」のカテゴリーでは、サンドの最高傑作のひとつに挙げられる『コンスエロ』を連載小説としての側面から捉え、サンドの概念に従えば、作家は「風が奏でる年老いたハープ」のような楽器にすぎず、作家は一種の「通過」であり「主体の不在と自己の忘却」を運命づけられていると分析する、作家を含む広義の意味でのサンドの「芸術家の役割論」を視野に入れて論証した「連載小説の偉大さと隷属――コンスエロ」や、サンドが作家となって間もない頃に書いた書簡の中で問題提起している「心の物語」と「感情のレアリスム」の問題について、モラルの要請ではなく美的な探究という文体論的アプローチから語りの構造と作家の現実に向けた関心とを関連づけて検証した「心の物語をどのように描くか――ジョルジュ・サンドにおける感情のレアリスム」などが印象に残った。

一方では、童話に関する発表も比較的多かったが、W・プロップの方法論やB・ベテルハイムの形態精神分析学を、集合的記

憶から個人の記憶への移動や相互補完的でもある二つの記憶の干渉を特徴とするサンドの童話の創作技法に結びつけ、これをサンドの「エクリチュールの戦略」であると論じた「民間伝承から文学なるものへ――『祖母の童話集』における不変と変容」や童話の発話の部分を支える母性的なミューズとしての「声」の「触媒の役割」に注目した「『祖母の童話集』における秘やかな言葉と声のファンタスム」などがその代表として挙げられる。

社会と作家との関わりという視点から、文学創造に大きな影響を及ぼした産業革命の時代に流行作家が抱く「咎の意識」を取り上げ、商業的富と創作に関わるサンドにみられる「作家の二つの現代的なアイデンティティ」に注目した「文学稼業のために――サンドの創作」、あるいは「サンドは社会の変革を目指しこれを小説化した」が、ドイツの理想的哲学者シェリングやシュレーゲルの作品の影響を受け、フランス社会に必要な多神教とキリスト教とを混合した新たな宗教神話を構築しようとしたとする発表や「『フランス一周の修行仲間』――伝統と創作の狭間で」など多彩であった。

本稿ではすべての発表について紹介することはできないが、このほか、ケルト文化の伝統に詳かであった民俗学者ともいえるサンドの知られざる一面やミッシェル・レヴィ出版社のサンド全集の出版に際し、『人間喜劇』とは異なる合理的な全集の出版を企図したサンドを照射した発表、音楽をテーマとした「ジョルジュ・サンドと音楽の想像界」「モーツアルトとベートーベンの間で――ジョルジュ・サンドの小説における文体」、書簡、旅、呼称の問題を主題とした発表など、「エクリチュール」という中心的テーマに収斂される、実に多種多様な個別テーマが扱われていたことを付け加えておこう。

各発表は持ち時間が三〇分、質疑応答が一五分と比較的余裕のある時間配分がなされていたが、どの発表者もあたかもその半分の時間しか割り当てられていないかのように、熱の籠もった早口で持論を述べていたのが印象的だった。

前述したように、夏のスリズィ国際学会の後、その年の年末にブルボン宮でもシンポジウムが開催された。それぞれの研究者の立場が交錯し、異論、反論があったことは否定できないが、同一テーマを巡る学際的発表の内容は、スリズィ城からブルボン宮に引き継がれ、そのいずれにおいても闊達な論議が交わされた。

二〇〇四年に繰り広げられたこれら一連のサンド関連の国際学会は、意識的であったにせよ、そうでなかったにせよ、結果として、各学会が有機的に連携し、あるいは、それぞれが様々な形で呼応し合い、国際学会のありようを模索しつつ独自のモデルを提示した。いずれの国際学会も口頭発表をもとにした学術論文集の刊行を企画していることからも、サンド研究の進化に大きく寄与したことは明きらかである。また、少なくともフランスでは、新たな超領域的学

術研究を目指すグループが発足したという事実に現れているように、サンド生誕二百年を軸に開催された多くの国際学会は、未来のサンド研究にとって多大な意義をもたらしたことは言を待たないといえるだろう。

写真5　スリズィ城全景

＊＊＊＊＊　補　遺　＊＊＊＊＊

【ジョルジュ・サンド生誕二百年記念行事（日本）—春の章】

第一部　日仏女性研究学会総会記念講演会

講演　一九世紀フランス女性作家——ジョルジュ・サンドの現代性——

(1)「第三の性」の作家、ジョルジュ・サンド　西尾治子（慶応義塾大学講師）

(2)アンディアナという女性　石橋美恵子（筑紫女学園大学名誉教授）

日時　三月六日（土）

会場　日仏会館（東京・恵比寿）・五〇一大会議室

主催　日仏女性研究学会

協賛　日本ジョルジュ・サンド研究会

第二部　ミッシェル・エッケ Michèle Hecquet（リール第三大学名誉教授）講演会

(1)テーマ　ジョルジュ・サンドの『わが生涯の記』—その時代と沈黙

講演者　ミッシェル・エッケ氏

日時　五月三〇日（日）

会場　白百合女子大学

主催　日本フランス語フランス文学会・日本ジョルジュ・サンド研究会

後援　フランス大使館

(2)テーマ「コレットとジョルジュ・サンド」

日時　六月二日（水）一六：三〇～一八：〇〇

会場　慶応義塾大学・来往舎一階シンポジウムスペース

主催　慶応義塾大学現代フランスと女性研究会・日本G・サンド研究会

(3)テーマ「ジョルジュ・サンドとその時代」

日時　六月四日（金）一八：〇〇～二〇：〇〇

会場　大阪日仏アリアンス・センター

主催　大阪日仏アリアンス・センター・日本G・サンド研究会

【ジョルジュ・サンド生誕二百年記念九つの行事（日本）—秋の章】

主催　ジョルジュ・サンド生誕二百年国際シンポジウム二〇〇四大会実行委員会（日本ジョルジュ・サンド学会）

共催　京都大学　慶應義塾大学　関西学院大学　上智大学　学習院大学　東京大学
協賛　日仏音楽友の会（AFJAM）日仏女性研究学会
後援　日仏会館　東京日仏学院　在日フランス大使館　朝日出版社　駿河台出版社　第三書房　いなほ書房　APEF

(1)「国際シンポジウム　ジョルジュ・サンドの二十、二十一世紀への遺産」
日時と場所　一〇月一六日（土）一七日（日）東京日仏学院（東京・飯田橋）
○一〇月一六日一三：〇〇―一八：三〇
一三時～一四時　コンサート「ジョルジュ・サンドの友人達――ショパン、リスト」
一四時半～一六時四五分　映画上映『青い旋律』（ジョルジュ・サンドの生涯）
一七時～一八時半　討論会［ジョルジュ・サンドと芸術］
パネラー　ニコル・サヴィ（パリ第三大学所属・ジャック・ドゥーセ文学図書館担当官）アンヌ・マリ・バロン（十九世紀映画論専門家・バルザック記念館副館長）
○一〇月一七日一三：〇〇―一八：三〇
一三時～一四時　コンサート「ジョルジュ・サンドの友人達――ショパン、リスト」
一四時半～一六時一五分　映画上映『年下の人』
一六時半～一八時三〇分　討論会「ジョルジュ・サンドのイメージ―その過去と現在」
司会　フランソワーズ・ギュイヨン（アムステルダム大学名誉教授）
パネラー　ニコル・サヴィ　ブリュノ・ヴィヤール（プロヴァンス大学教授）持田明子（九州産業大学教授）高岡尚子（一橋大学講師）西尾治子

(2)　一〇月一九日（火）　国際コロック　京都大学
テーマ「ジョルジュ・サンド――ヴィクトル・ユゴーの同時代人として」
司会　稲垣直樹（京都大学教授）
発表者　Nicole SAVY　Anne-Marie BARON　Bruno VIARD
コメンテーター　平井知香子（関西外国語大学助教授）坂本千代（神戸大学教授）吉田綾（大谷大学講師）

(3)　一〇月二一日（木）　J.-J.ディズ講演会　学習院大学
講演者　José-Luis DIAZ（パリ第七大学教授）
テーマ「サンドと十九世紀フランス文学をめぐって」
司会　Thierry Maré（学習院大学教授）

(4)　一〇月二二日（金）　J.-J.ディズ講演会　上智大学
講演者　José-Luis DIAZ
テーマ「バルザックにおけるアイデンティティの成立」
司会　澤田　肇（上智大学教授）

(5)　一〇月二二日（金）　B・ディディエ講演会　慶應義塾大学
講演者　Béatrice Didier（エコル・ノルマル・スュペリウール教授）
テーマ「ジョルジュ・サンドの文学における女性芸術家―文学と美学」
司会　橋本順一（慶應義塾大学教授）

(6)「国際シンポジウム　ジョルジュ・サンドの二十、二十一世紀への遺産―芸術と政

治―」

日時と場所　一〇月二三日（土）二四日（日）
日仏会館（東京―恵比寿）
入場無料同時通訳付（討論会）翻訳資料配布

◇一〇月二三日（土）

一〇：〇〇　開会の辞　日仏会館館長 フランソワーズ・サバン Françoise SABBAN
在日フランス大使館文化担当官　ピエール・クスト Pierre Koest

A．一〇：一五～一二：〇〇　司会　秋元千穂（慶應義塾大学講師）

●アンガージュマンとしての小説の技法
フランソワーズ・V・R＝ギュイヨン

●ジョルジュ・サンド、一九世紀女性知識人
―作品を通してみる創作の技法―
西尾治子

●『アンディアナ』におけるイギリス趣味と政治
石橋美恵子

B．一三：〇〇～一四：一〇　司会　坂本千代

●ジョルジュ・サンドと映像　サンドの人生と作品を映像化した映画とヴィデオ作品
アンヌ＝マリ・バロン

●ロマン主義時代の出版文化と『挿絵入りジョルジュ・サンド作品集』
平井知香子

C．一四：二〇～一五：三〇

●ジョルジュ・サンド、芸術と偶然―ペンと絵筆
ニコル・サヴィ

●『ローラ―クリスタルへの旅』における色彩と芸術
高岡尚子

D．一五：四五～一七：四五　司会　高岡尚子

●ジョルジュ・サンドの作品に見られる"naïf"の概念
渡辺響子（明治大学助教授）

●ジョルジュ・サンドの作品におけるモーツァルト―『わが生涯の記』『デゼルトの城』『ファヴィラ先生』
坂本千代

●ジョルジュ・サンドにおける女性芸術家小説
―政治と美学
ベアトリス・ディディエ

E．一八：〇〇～一八：三〇　コンサート
司会　マルグリット・フランス（AFJAM会長）
♪モーツァルト「魔笛」より♪ショパン　メロディー（ポーランド語付き）♪ドップラー「リギー山の思い出」♪モーツァルト　バイオリンとピアノのための「ソナタ」（ホ短調）

◇一〇月二四日（日）

F．一〇：〇〇～一二：〇〇　司会　西尾治子

●ピエール・ルルーの弟子サンドの考える諸世代の連鎖―『コンスエロ』と『わが生涯の記』から
ブリュノ・ヴィヤール

●ジョルジュ・サンド、政治に参加した女性―一八四八年二月の日々
持田明子

●『黒い谷』における民衆像
稲田啓子

G．一四：〇〇～一六：〇〇　司会　渡辺響子

●ジョルジュ・サンドにおけるクルチザンヌ像―イズィドラ
村田京子（大阪女子大学教授）

●ジョルジュ・サンドの『祖母の物語』における女性の問題
秋元千穂

●芸術と政治のあいだで―『ある旅人の手紙』の時（一八三五―一八五七）
ジョゼ＝ルイス・ディアス

H．一六：三〇～一八：〇〇　コロックの総括と討論
パネリスト
アンヌ＝マリ・バロン、ジョゼ＝ルイス・ディアス、フランソワーズ・V・R・ギュイヨン、ベアトリス・ディディエ、ニコル・サヴィ、ブリュノ・ヴィヤール、西尾治子
閉会の辞　大会実行委員会

【シンポジウム発表の概要】

「ジョルジュ・サンド国際シンポジウム二〇

○四（日仏会館）」は、「小説技法と政治」「芸術—前編・後編」「政治・ジェンダー」の三部から構成されている。発表者はフランスから招いた秀逸な六名のサンド研究陣および日本の中堅サンド研究者、仏文学博士号取得者、それに若手の博士課程在籍者を含む、国際的サンド研究の最前線を司る気鋭の日本人研究者の総計一六名である。

第一部の「政治参加としての小説技法」「イギリス趣味と作品*Indiana*における政治」「ジョルジュ・サンド・十九世紀フランス女性知識人」は、サンドの作品内部における政治・哲学思想の偏在性と両義性に着目しつつ、一貫したポリフォニックな詩的小説世界を構築するサンドの創作技法とバルザック、スタンダールやゾラのように堅固な文学理論をもたぬ女性作家における文学ジャンルの独創性を論証した。より具体的な観点から、第二部の芸術・前編では、「*Laura, voyage dans le cristal*における色彩と芸術」が鉱物学にも硯学であった作家サンドの芸術観とノヴァリスの作品にも通底するサンド独自の世界観との相関性を検証する。次いでロマン主義時代の出版文化に大きく寄与した「挿し絵家Tony Johannot」とサンドの作品との関係が詳細なデータをもって論じられ、「サンド、芸術と偶然—ペンと絵筆」と共に創作技法の背景となった科学と美術の役割を射程に収めるサンド論を展開している。第二部の芸術・後編の「モーツアルトとサンドの諸作品」および「サンドの作品を通してみられるnaïf」「映画化された創作作品」は、ロマン主義文学の中にサンドの作品と芸術観を位置づける試論であり、映像、音楽芸術と創作の共生関係についての綿密な論究でもある。

第三部の政治編では、「ルルーの世代継承論とサンドの自伝的作品およびコンスエロ」が、これまでルソーの思想的影響のみの多くが語られてきたサンドを、フランス初のフェミニズム運動体であるサン・シモン主義の系譜を継ぐピエール・ルルーの思想との関連において照射する一方、『黒い街』は、台頭する十九世紀フランス産業社会の一産業都市と民衆を描いたサンドの、現実をフィクションの中に独自の手法で描き込む創作技法を強調している。また「サンドの作品における女性芸術家像—政治と美学」「女性の問題と祖母の童話集」「ジョルジュ・サンドにおける娼婦の貌—イズィドラ」は、中、後期作品群の芸術上の枠組を再構築するのみならず、ジェンダーの視点からサンドの作品を捉え直した斬新かつ造詣深い考察である。

最後に「政治と審美の狭間で—ある旅人の手紙」は、倫理と美学の互換性およびこれを止揚統一し融合させる作者の創作姿勢を闊達に論じ、シンポジウム全体のエピローグとして、歴史学、社会学、女性学、建築学を始めとする諸分野の学際的研究を射程距離に入れた超領域的な国際サンド研究の未来のありようを示唆している。

(7) 一〇月二五日（月） B・ディディエ講演会 東京大学（駒場）
講演者 Béatrice Didier
テーマ 「前ロマン主義時代における文学とオペラ」
司会 石井洋二郎（東京大学教授）

(8) 一〇月二八日（木） F・V・R・ギュイヨン講演会：関西学院大学
講演者 Françoise van Rossum-GUYON
テーマ 「ジョルジュ・サンドの文学を巡って」
司会 博多かおる（関西学院大学教授）

(9) 一一月五日（金） F・V・R・ギュイヨン講演会：慶應義塾大学

講演者 Françoise van Rossum-GUYON

テーマ 「七〇年代フランスにおける女性のエクリチュール――エレーヌ・シクスー」

司会 橋本順一（慶応義塾大学教授）

ジョルジュ・サンド国際シンポジウム二〇〇四大会実行委員会

実行委員長：西尾治子 副委員長：高岡尚子 パトリック・レボラール

大会役員：秋元千穂 石橋美恵子 稲田啓子 宇多尚久 坂本千代 鈴木美登里 野母倫子 樋口仁枝 平井知香子 M・フランス 星田宏司 村田京子 吉田綾 渡辺響子